

高校同期同窓生と山を歩く

八十路半ばに近づく仲間たちとの会食

5月13日正午、北九州市戸畑駅前のレストランに高校同期同窓生5人が集まった。このメンバーは昨年1月福岡県内で入所・加療中の同窓生を見舞い、その人も含めた昼食会を共にした人たちなので、一年半ぶりの再会。

話題は同窓生の近況や高校時代の思い出など、旧懐談に花を咲かせる一方、各人の健康、今、取り組んでいる山歩きや趣味、ボランティア活動などを語り合う場となり、元気をもらい、またの再会を約して別れた。

宗像市内の里山でキエビネに出会う

その日の午後、宗像市内に住む友人の散歩コースと一緒に歩いた。友人が住んでいるのは数十年前に造成された住宅地だが、周囲には「里山」と言うにふさわしい低山・丘陵が残っており、自然の中の格好の遊歩道となっている。タツナミソウ、ハナミョウガ、ニワゼキショウなどの花が見られた。

↓キエビネ(ラン科エビネ属)



驚いたのは雑木林の中で、多くのキエビネが自生していたことだ。どの株も、緑したたる大きな葉をひろげ、鮮やかな黄色の花を幾つも縦に連ねて、すくくと立っていた。威風あたりを払うの感あり。嬉しかった。声に出してエールを送った。

それにしても盗掘に遭わないのだろうか。心配になり友人に問うと、「むしろ増えているのではないか」との答。楽しい散歩だった。

カルスト地形の中での花々

小さな駅舎にツバメの巣

翌14日朝、北九州市小倉(こくら)と大分県日田市とを結ぶ JR 日田彦山線の石原町駅に4人が集まった。

無人の小さな駅。待合室のど真ん中の天井にツバメが巣をかけており、3羽の雛が顔をのぞかせていた。最近見かけなくなったほほえましい光景だ。糞害には往生するだろうが、どうか温かく見守ってほしい。



いざ、平尾台へ

マイカーで平尾台に向かう。日本3大カルストの一つ・平尾台の景観とシランの自生地を鑑賞するのが主な

目当て。

9時「平尾台自然観察センター」駐車場に車を置き、草原が広がる中の舗装道路を上っていく。ホタルカ



ズラ、ソクシンラン、タツナミソウなどを楽しみながら歩くが、シラン群生地とは方角が違ふとのことで引き返し、見晴台近くの駐車場に移動し、見晴台まで歩く。

立ち並ぶ大小の石灰岩、そこに咲く花々



↓ハナミョウガ(宗像市)

丸みを帯びた白い石灰岩が緑の草原に立ち並ぶ様は「羊群原」とも呼ばれ、その緩やかな丘陵にドリネと呼ばれるすり鉢型のくぼ地、複数のドリネが合したやや大きな窪地(ウバーレ)などが各所に見られて草原に凹凸の変化をもたらし、さらにそれらの低地に育った濃緑の灌木林がアクセントともな



↑カノコソウ

て、見ごたえのある景観だ。
その草原と窪地に様々な花が咲いている。カノコソウ、ノアザミ、タカサゴソウ、
←ホタルカズラ ジャケツイバラ、ナルコユリそして所々にシランの群生も見られる。

初めて見るシランの大群生

しかし、雑誌で紹介されていた群生地とは違っている。草刈りをしている人に教えてもらって、やっと目的地の群生地を歩くことができた。緩やかな三つのピークをつなぐ草原に、たくさんの大小石灰岩とシランの群落が交じり合っ



て広がり、岩と花が互いに引き立てあっている。初めて見る光景だった。
心おどる思いで切ったカメラのシャッターだったが、きわめて出来が悪く、シランには申し訳ないこととなった。
草原の空気をたっぷり吸って、下山し、13 時過ぎ石原町駅に帰着。

シラン(紫蘭)の花

歌手・谷村新司がヒット曲「陽はまた昇る」で「鉢植えの紫蘭の花、朝の雨にうたれ---」と歌った時、私は紫蘭の花を知らなかった。その後私の記憶では、公園の植え込みでも家庭の庭でも、花屋さんの店頭にも急速に広がり、春を代表する花として全国民に知られるようになった。でも、私は外国産の外来の花とばかり思



↑タツナミソウ

↓ミヤコグサ いこんでいた。

日本の花だったシラン

しかし、シランは日本の山野に自生してきた花だったのだ。ラン科シラン属の宿根草。花の色も今では紫紅色だけでなく、白、淡紅色など多彩だが、野生のものは「準絶滅危惧種」に指定されている。雑誌の記事で、平尾台にシランの群生地があることを知り。九州の同窓生らと「いつか平尾台に行こう」との約束事をシランの花期に合わせて実施したのが、今回の山行となったのだ。付き合ってくれた仲間たちに感謝。

アマドコロ

